TALK

TRAIL AND
ARCHVE
LIBRARY
KATSURAGI

土地の記憶の再解釈

既存棟の眼前に広がるすり鉢状の地形、それはさながら池を舞台とした天然の円形ステージである。既存棟の一部を解体し、このステージを既存の大きな廃棄下に引き込むことで、人と土地との対話を呼び起こす。その営みは土地と池を辿って波紋のように敷地全体に広がり、建築という歌が響き始める。それはまさに人の営みを介した、土地の記憶同士の対話なのである。

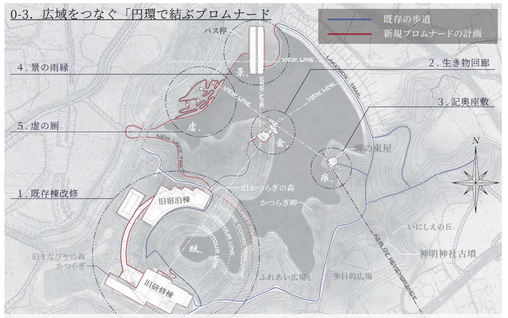
0-1．土地の魅力を拾い、過ごす場所へ

古より葛城の地は万葉の歌人たちに幾たびも詠まれ、その風景と神秘が歌に息づいてきました。この中戸新池周辺には自然、生き物、歴史などの「ここにしかない魅力」がたくさん受け継がれています。この普遍的な価値を丁寧に拾い集め、この場所にしかない、かつらぎの森の魅力に気づき、感じ、風景へ思いを馳せる「愛される場所」を目指します。

0-2．開かれた既存施設の活用にあたって

既存の施設は、「魅力ある池に対して閉ざされていること」「必要以上に大きな規模であること」を感じました。そこで、大きな気積を一か所に抱えるのではなく、敷地全体に分散させ、離散的なネットワークとして広がる計画を提案します。利用者は場所を移動しながら、魅力的な風景や自然、歴史と出会い、アドレスホッパーのように各拠点を巡る公共空間を体験できることを目指します。

0-3．広域をつなぐ「円環で結ぶプロムナード



もとからあるかつらぎの森の遊歩道を池の周囲全体へ延長し、プロムナードとして回遊性を高める。
それらを媒介する建築を計画することで、場所、人、本をつなぎ、敷地全体に循環をつくる。

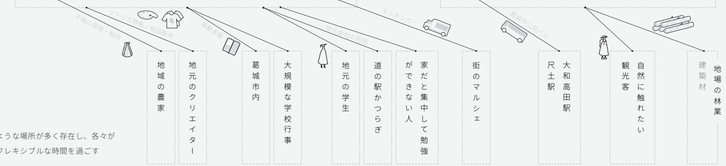
0-4．場所の魅力をより享受する図書館

従来の図書館と違う「点在した図書スペース」は、目の前の風景に関連した本の蔵書を目的とし、日常で目にする物事への感受性を向上させてくれる場所になることを目指します。

0-5．過去から未来へ繋げる、葛城にしかない建築へ

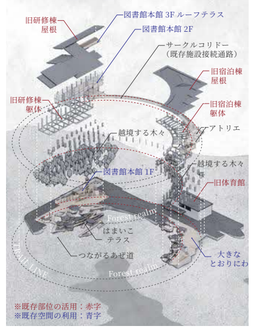
その他にも
高速道路の整備に伴う残土利用など、、、

0-6．地域を巻き込んだ「場所としての図書館」



本を読めるような場所が多く存在し、各々が思い思いにフレキシブルな時間を過ごす

1-1．既存を活かした公共空間へ



1-2．場所とつなげる

大きく分断された
人の場所と自然

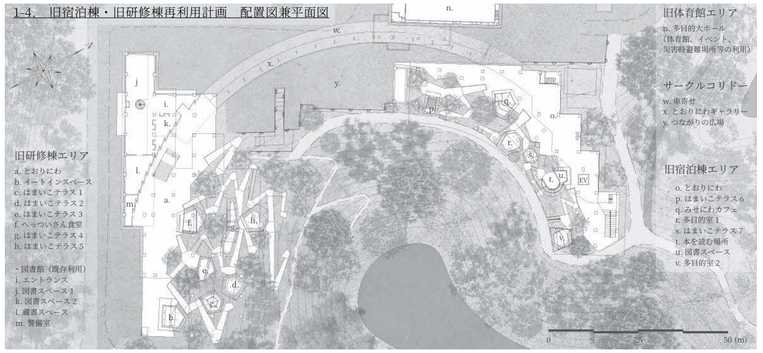
不必要な機能を外し
かつての等高線をつなぐ
内部に自然を注ぐ

大きな庇と躯体の隙間に
木々は居場所を見つける

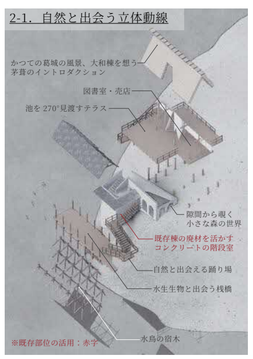
人は曖昧な空間に、
共存する居場所を見つける

1-3．はまいこテラス

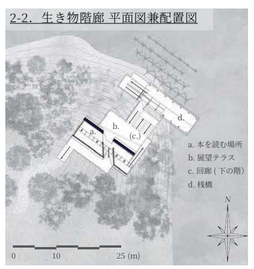
1-4．旧宿泊棟・旧研修棟再利用計画　配置図兼平面図



2-1．自然と出会う立体動線

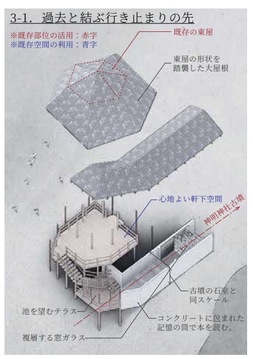


2-2．生き物階廊 平面図兼配置図

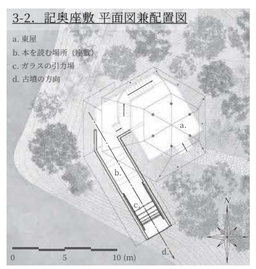


この場所は池と陸の接続点であり、豊かな生態系が育まれている場所である。生物たちが果たす自然への役割の理解を促進するため、池へ至るまでの３段階の動線を通じて、人 / 自然がさりげなく干渉し、共存する場を設ける。動線の中間に複数設けられた余白は、目の前の自然を享受し、本を詠み、自然を詠む場所である。

3-1．過去と結ぶ行き止まりの先

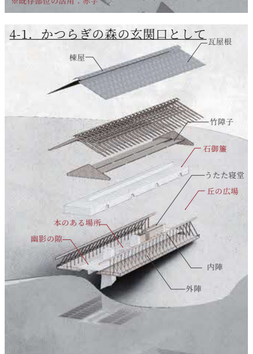


3-2．記奥座敷 平面図兼配置図

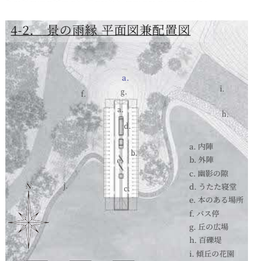


既存の東屋の屋根形状を生かしながら、少し離れた古墳のもつ軸線の延長線上に動線を添わせる。動線が軸に乗ったとき、古墳の石室と同じスケールの RC の筒状空間へ変わる。この場所へ向かうこと、行くことで、太古の記憶である「古墳」と今を生きる記憶である「東屋」の間の広い領域に対して、土地の記憶を浮かせる行為となる。

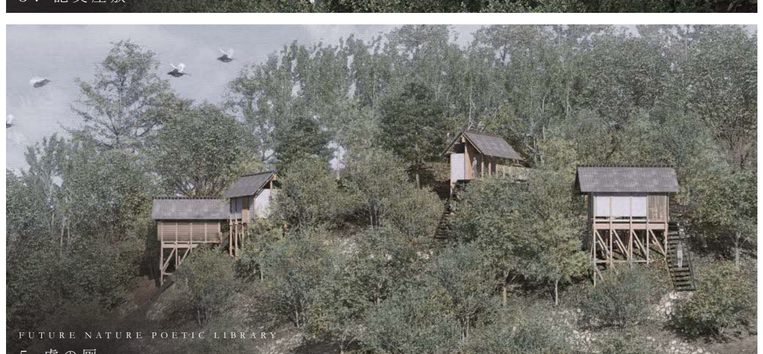
4-1．かつらぎの森の玄関口として



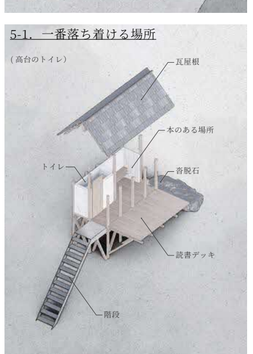
4-2．景の雨縁 平面図兼配置図



田畑と民家が果てしなく続く葛城の街並みと、緑陰に鎮まる水景を跨いで石御簾を垂らす。重厚と軽快の狭間に漂う石御簾の陰翳は、光を切り取り、この雨縁に佇む人の心に葛城千変の景を映し出す。破砕された既存棟の断片は、丘の広場や百礫堤の芯材として、構造体の基礎や骨材として、ゆっくりと時間をかけて土地へ還っていく。



5-1．一番落ち着ける場所



5-2．虚の厠 平面図兼配置図

中戸新池の北西に広がる豊かな森林は車道にしか接しておらず、比と自然の共存する場所がない。ここに車道と桟橋（水鏡の街道）をつなぐ山道、４つの厠を配置し、人々がより自然に遊る空間を設ける。山道には既存施設の再生砕石を用い、場所と記憶を結ぶ。
移る窓の風景は、静寂の中の虚の感情を浮かべ、自然を詠む。